

P2-030

低出生体重児における離乳の問題に関する研究

高野 梨沙¹、大岡 貴史²

¹明海大学 歯学部 社会健康科学講座 口腔衛生学分野、

²明海大学 歯学部 機能保存回復学講座
摂食嚥下リハビリテーション学分野

【目的】

低出生体重児の出生割合は近年増加傾向にあり、出生数の約9.6%が低出生体重児である。出生後の成長発達では、運動発達や言語発達に遅れがみられる場合があり、離乳の遅れや摂食機能発達にも問題が生じることもある。本研究では、低出生体重児の離乳期に見られる問題を把握することを目的として、低出生体重児の離乳状況の実態調査を行った。

【方法】

対象は、埼玉県内の某医療センター新生児外来にて摂食指導を受けた低出生体重児45名（男児26名、女児19名）である。全員が生後6か月から12か月の間に摂食指導を受けており、受診時の平均生後月数は8.9か月（標準偏差2.3か月）であった。なお、今回の対象からは脳性麻痺などの先天障害が強く疑われる児、哺乳障害により経鼻経管栄養を長期間実施されている児は除外した。栄養を離乳に関する問題については、保護者の主訴、粗大運動発達の段階、哺乳や離乳食の内容、対象児の摂食機能を診療録から抜粋し集計した。なお、研究実施に際しては本学倫理委員会の承認を得た。

【結果】

保護者からの主訴で最も多かったものは「離乳食を食べる量」に関する内容（69%）であり、続いて「離乳の進め方について」（42%）と「咀嚼について」（24%）が続いた。粗大運動発達については、ほぼ全員で生後月数と比較して遅れがみられており、未予定の児が約40%認められた。摂取しているものの主な内容は人工乳が58%であり、母乳が24%、ピューレ状の離乳食が16%であった。摂食機能に関する主な問題点は、食事の嗜好、捕食時の口唇閉鎖不全、口腔内の感覚過敏などが多く認められた。

【考察】

低出生体重児の離乳においては様々な問題がみられ、保護者は特に摂取量や栄養などの問題を感じるが多かった。また、摂食機能発達に問題が生じている場合は粗大運動発達にも遅れが生じていることが多く、口腔の発達のみならず全身的な発達を考慮した離乳指導や、多職種と連携した支援が必要であることが示唆された。

P2-031

「夜泣き」に対する市民の意識調査

服部 益治¹、大倉 完悦²

¹兵庫医科大学 小児科学、

²大倉クリニック

【目的】

「夜泣き」は生後3か月頃からみられ、保護者とくに母親が寝不足に悩まされる。母親の就業率アップの時代と相まって、保護者の寝不足は育児のさらなるストレスとなる。そこで、夜泣きに対する市民意識を調査するとともに、今後の対応を検討する。

【方法】

夜泣きに対する市民の意識調査を、(1) インターネットアンケート調査（コンビタウン（コンビ（株））、(2) 保育園での聞き取り調査から検討する。聞き取り内容は、「夜泣き」の体験の有無、頻度および程度はじめ、各家庭の対策および対応法、病気かどうかの認識、腸内フローラの関係の知識の有無などである。

【結果】

(1) インターネットアンケート調査の「コンビタウン」では、夜泣き経験は2007年調査（回答合計数1,485件）で頻繁21%・時々40%の計61%、2013年調査（回答数519件）で頻繁24%・時々39%計63%とともに6割超であった。2013年調査で継続期間については4か月以上が36%であった。夜泣きの対応について多かったのは抱っこが81%、授乳が73%であった。誘因について不明との答えは55%であった。(2) 保育園での聞き取り調査（2015年、回答数18件）から、夜泣き経験は56%、期間3か月以上は50%、対応については抱っこ50%・授乳28%であった。夜泣きが病気と思わないが94%で、腸内フローラとの関係を疑うのは0%であった。

【考察】

夜泣きの頻度は少なくなく、その期間は短くない。しかし、なぜ夜泣きするかわからないのが現状であった。女性就業率アップの昨今、何度も夜中に起こされ睡眠不足は保護者特に母親にストレスとなり、育児への影響が懸念される。「寝る子は育つ」だが、夜泣きの保護者に日本のことわざ「泣く子は育つ」は励ましになるのであろうか。また「いずれなくります」「頑張らしましょう」とあしらわれているのではないだろうか。乳幼児の育児の悩みごとランキングで夜泣きが第一位の報告もある。近年、腸内フローラの一つ *Lactobacillus reuteri* が夜泣きの改善に効果があるとの報告がある (Tracy Harb et al : Infant Colic - What works: A Systematic Review of Interventions for Breastfed Infants. Journal of Pediatric Gastroenterology and Nutrition, 12, 2016)。夜泣き対応の選択肢として試みる価値がある。